

本物の音楽体験で、自分だけの色と形が溢れ出た！ —音楽ホールのステージ上で行う造形活動から—

島根県立大学人間文化学部 准教授 福井一尊



1. 抽象表現を難なくやってのける子供の姿

「素晴らしい音楽を聴いて、抽象画が描けますか？」と聞かれたら、私は何と答えられるでしょう？自信を持って、描けそうです、描きたいです、とは言えないように感じます。美術を専門とする大人であってもです。ところが、先般講師を務めた、小学生を対象とした造形ワークショップでは、始まりの合図と同時に、全ての参加者が一心に抽象表現に向かう姿に出会いました。躊躇なく制作に没入した参加者は、途中で他者の作品を気にする素振りも全く見せず、一気に作り上げていくのでした。そのような場面に初めて出会った私は、講師でありながらとても驚き、また制作後に自らの抽象表現について饒舌に語る子供の姿に感動すら覚えたのです。今回はそのような私の感動体験について報告します。



2. 音楽ホールのステージに寝転んでみよ！

私の暮らす島根県松江市の中心部に、市立の音楽ホール”プラバホール“があります。全国でも珍しく、ステージ中央には大きなパイプオルガンが鎮座している音楽のためのホールです。年間を通じて、世界中から音楽家が集い、様々な催しが開催されています。その一流のステージが自由に使えるタイミングが訪れました。改修工事です。ホール専属のオルガニストと私は、工事期間に入る直前に、ホールを地域の子供たちと思いっきり楽しむ企画を考えました。全国に誇る巨大なパイプオルガンの響きを全感覚で

感じる体験です。最もその響きを感じられるステージ上で寝転んでみると、ステージ自体が大きく振動していることが分かります。パイプオルガンの音が一旦天井に上がり、天井からホール全体に降り注いでいることを聴覚と視覚、そして身体感覚で感じられるのでした。この音楽を浴びる体験は感情のヒダを揺らします。その感動を色や形で表現する造形ワークショップを計画したのです。



3. ワークショップの流れ

(1) 感覚を開いていくためのプロローグ (10分)

参加者には、まずは客席に座って、様々な音色やスタイルの異なる短いオルガン曲を4曲聴いてもらいました。自らの五感を意識して音を感じます。感覚を解放し、ホール全体が大きな楽器で、自分たちがその中にいる感覚を共有します。オルガニストと私は、天井の高さや形、壁の素材や形状について参加者に問いかけます。自分はホールのどの位置にいて、座っている椅子や手すりとはどんな手触り肌触りなのか。温度はどうか。胸やおなかに手を当てて息を吸ったり吐いたりしながら、呼吸する楽器と言われるオルガンと一体化する錯覚を楽しみます。音の波がやってくるスピード、形、色、物語などの想像を促しながら、曲名を告げることなく聴いてもらいました。

(2) ステージに上がって音楽浴 (10分)

曲の鑑賞中に、参加者にはステージ上に移動してもらいます。参加者が、ステージ自体が振動していることに気付くと、座ることを促します。そうするとお尻から体全体に音の波が広がっていくことが感じられます。次に寝転ぶよう促してみると、背中や髪の毛からも音楽が感じられ、音や曲の特徴が形となって届く感覚を得ます。低く唸る風の音、鳥のさえずりのような音楽、ひとつの音色からオーケストラのようにどんどん音色が増えていく壮大なシーンなどを演奏してもらいました。

(3) 音楽と美術のコラボレーション開始 (15分)

まずは私とサポート学生による造形のデモンストレーションを行います。オルガニストには33種類のパイプから特徴的な音色を即興で演奏してもらいます。私は色紙(いろがみ)の様々なちぎり方ができることや、自由に色画用紙に貼り進めて良いことをパフォーマンスで伝えます。また聞えてくる様々な種類の音を私がオノマトペで表現(びゅ〜ん、きらきら、ぼわ〜ん、ず〜ん、しゅわしゅわ etc.)し、子供たちにも音の特徴を自らの中で再構築する手助けを行います。オルガニストに弾いていただいた音は、低い振動で風のような音、キラキラとした金属音、うねりのやさしい音、トランペットのような音の塊、

小鳥が鳴くような音、雨粒が落ちるような音などです。ここまできると、参加者は自分も造形表現したい思いでいっぱいの様子です。



(4) 音楽を色や形で表現しよう (40分)

ホールの形は楕円形です。制作の土台となる色画用紙も楕円形の物をたくさん準備して、子供たちに色を選んでもらいました。その楕円形の色画用紙に 93 色の色紙をちぎって貼って表現をします。ステージ上の好きな場所に画用紙を置き、色紙を広げると制作意欲が一気にピークに高まります。色紙を破る感触や音も面白いので、どんどん新しい形が誕生します。その色紙を並べたり重ねたりしながら貼り進めると、また新たな形が生まれてくるのです。頭の中に完成図があるかのように、次々と色を選び、形を生み出しては貼っていきます。造形を始める前こそ周囲の様子を気にしていた子供も、瞬く間に集中します。ほとんど会話も発生しないその真剣な表情からは深い自己対話をうかがうことができました。

制作中も、オルガニストには即興でパイプオルガンを奏で続けてもらいました。



(5) 盛り上がるシェアタイム (25分)

およそ40分間の制作の後、5~6人グループになって、それぞれの作品を発表しました。同じ音楽を聴いても着目する箇所や捉え方、また表現の方法はまちまちです。一枚一枚から個性が滲みだしているのので、作品が集まるととてもエネルギッシュな空間が現れます。一人ひとりの中で起こった不思議な感動体験の共有で対話が盛り上がりました。

その後、各グループから代表者を選出して全体で発表してもらおうとしましたが、皆が語りたくて仕方ありません。自己の中で起こった感動体験を作品に昇華することで、一回りも二回りも膨らませることができ、人に伝えなければならない姿に見えます。何とかグループ内から代表を選び出し、投影した作品を作者と私が言葉をやり取りすることで発表・共有しました。抽象的な自己表現について、小学生が饒舌に語る姿に、サポートする大人たちは感心するばかりでした。参加した全員が発言することで、とても成就感の感じられる作品シェアタイムとなったのです。



【ワークショップの概要】

名称：「音を描く ~organでArt~」

講師：福井一尊（筆者） 米山麻美（プラバホール専属オルガニスト）

日時：2022年5月21日（土）10:00~12:00

場所：松江市総合文化センター「プラバホール」

参加者：小学生 30名

主催：地域が盛りあがるプラバ応援隊実行委員会

4. 参加者のアンケートから

●質問①【やってみて、どんな気持ちですか？】

- ・音楽の通りにアートができたのでいい気持ちです。
- ・表現できてうれしかった。音を表現するのはむづかしかったけどできてよかった。
- ・音をきいて、色や形で絵をつくることはやったことがなく、不思議な感じだったけど、そこが楽しくて、おもしろかったです。
- ・コロナの中で、パイプオルガンをまじかで聞けるなんて…すごい！

●質問②【なんでそう思うかな？】

- ・音楽のそのとおりにアートができてうれしかったです。
- ・音が高くなったりキラキラした音が聞えた ペタペタしたりビリビリしたりして気持ち良かった
- ・音楽を、色や形であらわすことができるようになったから。
- ・オルガンの音がとても良かった。紙をやぶるのがおもしろかったから。



5. 表現する必然性

小学校の授業等で見られる児童が手を挙げて発言する姿から、私は、子供は知ったこと、気が付いたことは誰かに伝えたい存在だと考えています。今回、参加者が本物の音楽体験をすると、表現したくて仕方がなくなる姿をたくさん確認できました。そのことを併せて考えると、モノを知ったり気がついたりした時、その人は感動しているのではないのでしょうか。また、得た感動は表現する必然となり、授業等で児童に表現活動を促す際に、そこに必然性があれば、表現活動は至極自然な営みとなることを改めて感じました。

そして、制作後に作品について語りたくて仕方がない子供の姿から、感動体験が個々に表現の必然性を生成し、触覚を用いた表現活動が言葉での伝え合いを醸成することを見とどけました。語らずにはいられない様子からは、言葉にして伝えることで自らの変化を確認し合い、ようやく安堵していく姿に見えたのです。

アンケート用紙に綴られた参加者の言葉には、表現することですっきりしたという言葉が多く見られました。それらの言葉には、本物の感動を覚え、没頭してつくり、語り合うことで、成就感を伴う個々の育ちを共有できた喜びが内包されているのではないかと考えています。

